

# 音楽と社会の発達についての一考察

## A Study of Music and Social Development

(1988年4月7日受理)

古松直明

Naoaki Furumatsu

**Key words:** 現代社会, 美的価値, 人間性

### 1. 現代社会における音楽の有用性

現代のこの画一化されつつある社会, いな, 情報化社会の長所というか短所というか, この情報発達にともなって, 人間社会は確実に画一化の方向に進んできているように思えるのである。全体的レベルアップという点においては, 非常に有益であるにちがいない。しかるに, ここで忘れてならないのは, この画一化の中の創造を無味乾燥なものにせず, 真の意味の許される範囲内の個性というものを, もっと見直していく必要があるように思われてならないのである。

「美は秩序の輝き」というユングの言葉を思い出して欲しい。「美は秩序の輝き」これをどう受けとめられるであろうか。非常にかたくしく受け止められる人が多いであろう。言い換えれば, そうあるべき当然の道筋, そうあるべき必然性を感じるわけであろう。しかし, これは大河のごとき大きな流れに乗ってればよいものではない。この容易さののっかりやすいのが現代社会なのであり, この流れの中で, 自分を生かすことは, 大変むずかしいことなのである。芸術の分野においても, ことさら, この傾向は強くなってきていることを感ずるのである。科学の発達はずばらしいものを我々に与えるのであるが, 決して科学に振りまわされてはならない。

音楽はこういう中であって, ずばらしい潤いを我々に与えているのである。音楽がなぜ現代社会の中に息づいているのであろうか。無意識の中に人間の本来の姿を感じているのではないだろうか。音楽ほどそうあるべき道筋・必然性を求めてやまないものはないのである。ベートーベンの草稿を見よ。いくたびも練り直され, 真実を求めてやまない姿に感動しない人がいるだろうか。なぜ感動するのだろうか。人間にはいかなる仕事の上においても心の葛藤というものがある。いな, 芸術においてはこれこそが原動力となって, 奥深い精神を赤裸々に告白することになるのである。音楽におけるこの表現動機と芸術動機, この心の葛藤に打ち勝ち, 勝利者となるには並大抵のことではない。

これはとりもなおさず形式というものである。音楽でいう形式, これこそが音楽の真の姿なのである。が, 我々は決して誤解してはならない。非常にかんじがらめのむつかしい印象を与えるかも知れないが, 決してそうではないのである。人間社会においても, 人間社会の秩序のために守らねばならないことがあるのと同様である。しかしここで注意しなくてはいけないことは, そういう約束事を日常気にしているだろうか。そういう社会のなかで, お互い認めあって生活し, そういう社会の中でこそ, 人間本来の姿を見るのではないだろうか。

音楽またしかりなのである。形式があって音楽が存在するのではない。真の音楽を追求すれば, こう

進まなければならない、という必然性を認識するのである。この真の必然性を察知するものこそ、より深い芸術を理解し、より深い真の喜びを感得することができるのである。人間社会の中においても、これとまったく同様のことをみるのである。秩序はお互いに拘束したり、お互いのがんじがらめにするのではなく、お互いの個性を尊重し、認め合うことによって、秩序というものが自ずから生まれるのである。形式が、秩序が決して個性を殺すものではない。形式こそが個性を生かし、最もよく表現し得るものなのである。

## 2. 美的価値の多面性

ものには一つの価値とそれらを積み重ねたものが存在する。音楽においては、とりわけ単純感覚美と総合形式美なるものである。「単純感覚美」これはとりもなおさず、一つの音の美しさを求めるのであり、「総合形式美」は、これらの積み重ねである。音楽においては、この両方から成り立って我々の「聴覚」に訴えてくるのである。ある人が「声」を出すと、あの一つの音はあの人より美しいとか、きれいであると感じるかもしれない。しかし、ここで問題なのは、個々の音がすばらしければ、音楽全体が「すばらしい」と果して断言できるだろうか。「表面的な美しさ」が表面にたちすぎると、それは希薄なものとなり、まったく「意味」を持たない、白痴的な美しさだけが残し、我々に存在価値さえ感じさせない、まったくへりくだったつまらないものへと、墮落していくのである。しかし、ここで誤解してもらっては困るのである。一つの音はもちろん美しくあらねばならない。

ここで問題になってくるのは、「美」とはなにか、ということなのである。人は、美しい、きれいだ、すばらしいなどと、よく感嘆詞を使う。しかし、いったい何を基準にしているのだろうか。この基準は個人の感情である。この「感情」こそが非常に厄介な問題を提起するのである。ある人を美しいと人はよくいう。しかしそれは外観が美しいのか、着物がすばらしいのか、全体の調和がとれて美を感じるのか、そして、この感じ方は人によって異なり、その日のその人自身の状態によっても感じ方が違ったり、趣味によっても異なることがある。不断あまりこのようなことは考えずに我々はよく使っているが、「美」とはいったい何であろうか。

美の「成立過程」を観察すると「美」というものが「成立」するまでには、多くの困難や、いろんな事情を通り抜けて「成立」し、また、みにくい面を残しながら消えさってゆくを知るのである。これはたとえば自然界に目を向けてもよい。我々にすばらしい憩いと緑を与える草木も、厳しい自然の中で耐え抜いてきた姿なのである。こうみえてくと「美」の中には、この世のもろもろの経験をしたのちに、我々の前に表われる非常に奥の深いものであると感じるだろう。「美」とは決して一面的な美しさで、我々の前に表われるものではないことを知るだろう。音楽の美においても、これと同様の現象がおこっているのである。

「絵画」に目を向けてみると、絵の具それ自体は、赤でも青でもそれなりの美しさは持っている。しかし、よく考えてみると筆者が述べようとしている「美」とは全く違うことに気づくだろう。絵の具自体は、まったくの死に体といってもよいのである。ではなぜこれが「美」になりうるのだろうか。「美」とは、何をいおうとしているのであろうか。これはとりもなおさず、何かを「表現」しようとする人間の「精神性」にあることを知るのである。それもバラバラの絵の具ではなく、みだりにぬりたくったものでもない。何かまとまったある事物を表現しようとしているからである。それがとりもなおさず、そ

の人の心の奥底、今まで積み重ねてきた深い「精神」の「告白」なのであり、「音楽」においても、同じように考えて見ると、「音自体」は何ら「意味」を持たないただの「素材」でしかない。音楽の音を広げて、音だけをみるとこの世にはいろんな音が充満している。自然の風の音、波の音、小鳥のさえずり、石を打つ音、木をたたく音、サイレンの音、自動車の警笛、種々雑多のまざった騒音と、あげればきりが無い。

話を元に戻して、ただ一つの音、これは絵の具の材料としての色と大変似かよっている。「絵画」と大きく異なる点は、「作者」「絵」「鑑賞」であるが、音楽においては絵画と同様、音自体は何ら「意味」を持たず、「意味」を持たせて「作曲」されても、実際現実の音とならなければ「意味」を持たない。そこで「絵画」と違う「追体験」をする「再現者」、すなわち、演奏者なるものが存在するのである。したがって、美的感覚なるものは、時代をこえ、国をこえ、人種をこえ、趣味をこえ、年齢をこえ、男女をこえ、あらゆる条件のもとで「美」の「再現」がなされている。はたして、正確に作曲者の意図を伝えているだろうか。

人間はすべて呼吸している。音楽もまた「呼吸」している、といった方がいいだろう。「音程」を見なさい。「和音」を見なさい。いろんな和音が「緊張」と「弛緩」とを繰り返しながら進んでいく姿を見るがよい。「不安定」な音がくれば「安定」の音程に進もうとする。これはあたかも、人間が呼吸するのとまったく同様であることを知るだろう。これこそが真の「活力」であり、存在価値の根源なのである。そして、それらの不協和音、協和音が折り重なって、奥の深い「美しさ」、いな、人間の真の美しさを知るのである。決して、我々は表面的な美しさを求めるのではなく、真の美しさを追い求めるならば、その人は真に人間を愛し、「芸術」の喜びを知るだろう。

### 3. 社会の発達と音楽の発達

音楽は「全体的バランス」また「調和」であるといっても過言ではないだろう。「有機的」に関連づけられてこそ真の「必然性」、かくあるべき必然性を感得するのである。しかし、ここで忘れてはならないのは、決して「芸術」は社会と隔絶して存在するものではない。よく芸術至上主義的な立場を主張する人たちを見かけるが、決して完全に社会と遮断できないことを知るだろう。人間は決して一人では存在しない。必ず何らかのつながりを持っているものである。現在でも人里離れた所とか、無人島で作曲するという話をよく聞くが、今まで生活してきた環境、また、彼らを育ててきた人間社会を逸脱することがはたして可能であろうか。いなである。

我々はここに芸術はその時代の社会思想、政治等が非常に密接に関連しているのであることを知ることなしに真の芸術を知ることはできない。古来の大作曲家といわれる人々すべてその時代の社会の発達、政治、他の芸術、哲学、文学、詩、絵画、建築等と密接なつながりを持っているのがよくわかる。ベートーベンの32のピアノソナタ、これはベートーベン自身の成長もさることながら、ピアノの発達史ともいえるのではないか。資本主義の発達、特にピアノにおいては、鋼鉄線の発達、ピアノペダルの発達は、ベートーベンの創造の世界を刺激してやまなかった。この楽器の発達こそが、あらゆる作曲家の刺激剤になっていることは歴史を見れば一目瞭然である。ここで参考程度にとどめるが、ベートーベンの作曲年代と日本史の年代を簡単に掲載しておく。

日本人は大変ベートーベンを好む。一体何ゆえであろうか。また、それは何を意味し、日本人にとつ

てどんな効用をもたらしているのか。その時代にベートーベンが日本に存在するだろうか。よく年代を把握して欲しい。バッハの時代を見ると水戸光圀の晩年あたり、將軍綱吉の活躍した時代である。ベートーベンが活躍した時代は、將軍家治・家斉の時代で、封建社会の真っ只中で農民一揆等、社会市民は非常にしめつけをくっていた時代である。

表1 ベートーベンを中心に見た音楽と社会の変動についての年表

(シェーリング, 1971より一部引用)

年	ベートーベンを中心に見た社会の情勢 【 】内は日本の情勢
1700	コレルリ「バイオリンソナタ作品5」。 <b>【徳川光圀死去】</b>
1702	<b>【赤穂浪士吉良を討つ】</b>
1737	ストラディバリ死去(クレモナで活躍した)。
1770	ベートーベン誕生。ヘーゲル誕生。ゲーテ『ファウスト』書き始める。 ドイツ諸都市で昔の城を取り壊し散歩・休息の場所とする。
1771	<b>【杉田玄白 解剖見学】</b>
1774	<b>【杉田玄白 前野良沢『解体新書』刊行】</b>
1775	アメリカ独立戦争1783年まで。
1779	<b>【平賀源内死去】</b>
1781	カント『純粹理性批判』
1782	モーツァルト「後宮よりの誘惑」ウィーンで上演。パガニーニ誕生。 ヴィオッティ初めてパリに現わる。新しいバイオリン演奏の時代始まる。 フランソワ・トウルート(1747年生)によってバイオリンの弓が改良される。
1784	ポマルシェ『フィガロの結婚』[革命的傾向を持つと評価される。]
1786	モーツァルト「フィガロの結婚(イタリア語) K492」ウィーンとプラハで上演。
1787	ハイネ『アルディンゲロ』。ゲーテ『イフゲーニエ』完成。 モーツァルト「ドン・ジョバンニ K527」プラハで上演。 ベートーベン始めてウィーンに行く。 <b>【老中 松平定信 寛政改革始まる】</b> 。
1788	ゲーテ『エグモント』。カント『実践理性批判』。ショーペンハウアー誕生。モーツァルト最後の交響曲3曲完成。
1789	フランス革命起きる。ワシントンがアメリカ初代大統領となる。
1790	カント『判断力批判』[音楽美学に関する重要な言及を含むとされる]。 ハイドン12曲のロンドン交響曲完成。オックスフォードの博士号授与。 <b>【寛政異学の禁】</b> 。
1792	フランス国民公会 共和制を宣言。ベートーベン22歳でウィーンに出て、ハイドン、シェンクおよびアルブレヒツベルガーに師事した。
1795	ゲーテ『ローマの悲劇』。シラー『人間の美的教育に関する書簡』。ロマン詩派が台頭。 ベートーベン「ピアノトリオ作品1」ハイドンに捧ぐ。 <b>【力士谷風死去】</b> 。
1797	ゲーテ『ヘルマンとドロテア』。シューベルト ウィーンに誕生。 ロホリッツ音楽時報[すぐれた報道を始めた]。

- 1799 シラー『バレンシュタイン』『鐘の歌』。シェリング『自然哲学に関する論文』。ハイドン「天地創造」ウィーンで最初の公開演奏。  
ベートーベン「悲愴ソナタ作品13」出版。
- 1800 シラー『マリア・シュトゥアルト』。シェリング『先験的観念論の体系』。  
ベートーベン「交響曲第1番ハ長調作品21」,「弦楽四重奏曲作品18」,「ピアノ協奏曲第3番ハ短調作品37」。  
【富士山へ女性の参詣を許可する】
- 1802 ベートーベン ハイリゲンシュタットの遺書を書く。「ピアノソナタ作品31」。  
ペテルブルグにフィルハーモニック協会が設立され定期的な演奏会が始まる。  
【十返舎一九『東海道中膝栗毛』流行】
- 1803 ベルリオーズ誕生  
ベートーベン「交響曲第2番ニ長調作品36」ウィーンで初演。  
【アメリカ船が長崎に来航,通商を求めたが許可されず】
- 1804 シラー『ヴィルヘルム・テル』。カント死去。  
ベートーベン「交響曲第3番変ホ長調『英雄』作品55」完成。初演1805年。
- 1805 シラー死去。  
ベートーベン「フィデリオ」試演。
- 1806 ヘーゲル『精神現象学』完成。ドイツ帝国の滅亡。  
ベートーベン「交響曲第4番変ロ長調作品60」初演1807年。「バイオリン協奏曲ニ長調作品61」。
- 1807 ベートーベン「コリオラン序曲作品62」「熱情ソナタ作品57」「三重協奏曲作品56」印刷。  
ミラノ音楽院設立。
- 1808 ゲーテ『ファウスト』第一部刊行。スイス音楽協会設立。  
ベートーベン「交響曲第5番ハ短調作品67」「交響曲第6番ヘ長調『田園』作品68」ウィーンで初演。  
【間宮林蔵カラフト探検】
- 1809 ハイドン死去。メンデルスゾーン誕生。【上田秋成死去】
- 1810 ベルリン大学が設立され,ドイツ学問の中心になる。機械印刷の発明。  
蒸気船の進出。農奴制の廃止。ショパン誕生。シューマン誕生。  
ベートーベン「エグモント作品84」「ピアノ三重奏曲変ロ長調『大公』作品97」。  
音楽時報にベートーベンの第5交響曲に対するホフマンの批評が掲載され,これが新しい音楽批評の始まりとなる。
- 1811 ゲーテ『詩と真実』。リスト誕生。ブラハに音楽院開校。
- 1812 ウィーン楽友協会が設立される。プフントによって機械装置のついたティンパニーが発明され,演奏され始めた。
- 1813 ドイツ自由解放戦争。ワーグナー誕生。ブリュッセル音楽院設立。  
ベートーベン「交響曲第7番イ長調作品92」。

1814	ナポレオンがエルバ島に流される。スティーブンソン蒸気機関車発明。 ベートーベン「フィデリオ作品72」, 第3改訂版「交響曲第8番へ長調作品93」(1812年完成)が初演。
1815	メルツェルがメトロノームを発明。【杉田玄白『蘭学事始め』】
1816	ピストンつきホルンに改良, ピストンつきトランペットに改良。 【伊能忠敬 全国の測量終える】
1818	ショウペンハウアー『意志と表象としての世界』。 蒸気船が初めて大西洋を横断。 ベートーベン「ピアノソナタ変ロ長調ハンマークラヴィア作品106」。
1821	ギリシャ独立戦争。ナポレオン死去。 ウェーバー『魔弾の射手』ベルリンで試演。
1822	ベートーベン「荘厳ミサ曲」完成, 最後の「ピアノソナタハ短調作品111」。 ベルリン王立教会音楽学院設立。ロンドン王立音楽アカデミー設立。
1824	ベートーベン「交響曲第9番ニ短調『合唱』作品125」ウィーンで演奏。
1826	ウェーバー『オベロン』6月に死去。 ベートーベン『弦楽四重奏曲嬰ハ短調作品131』。
1827	ベートーベン ウィーンで死去。

ベートーベンは偉大なる音楽家であったが同時に、思想においても他の面でも人々を啓蒙していった。特に忘れてならない一つは、音楽を民衆の前に引っ張り出したということである。それまでは、ほんの限られた範囲内で、音楽が行われていた。ハイドン、モーツァルトにしてもしかりである。彼らは決して、音楽の真の独立を勝ち得ていない。貴族の玩遊物であったり、限られた範囲内の社交場であったりしたのであった。また、作曲においても、真の自己創作よりも、多くは注文に応じて作曲されたのである。これは音楽の弱さである。形としてはっきり存在しないし、また、物を生産しない芸術の弱さは日本の音楽界をみれば一目瞭然である。経済的裏づけがないためでもあるが、このように、音楽はいわゆるスポンサーというものによりかかっていたのである。それをベートーベンは長い歴史の殻を、ついに打ちやぶり、音楽を真の人間の告白、全人格的表現にたかめ、独立を勝ちえたのであった。これはベートーベン自身だけでなく、その時代、社会、政治、他の芸術と密接につながっていることがわかる。政治においては、フランス革命の時代、自由・平等・博愛の精神のもとにナポレオンが風雲をまきおこしていたのであった。ベートーベンを理解するには決して忘れてならない時代であり、また、ヘーゲル、シラー等哲学者たちとの深い関わりのあることはよく知られているところである。とくにシラーの「歓喜によす」の詩にもとづいた「第9交響曲」は知らない人はいない。音楽を知らない人にも浸透している。これらを研究することによって、いかにベートーベンがその時代から影響を受け、時代を超越していったか、如実に物語っている。いかに共和的思想を持ち、人間を愛し、自由を愛したか我々は感動を覚えてやまない。

また、資本主義の発達とも密接な関係もあるのだが、音楽が多くの人々の前で演奏され出したことである。今まではいろんな状況、社会的背景もあった。会場が狭いこともあった。また、楽器の性能のこともからんでくる。これは“卵が先か鶏が先か”のところもあるが、なによりも忘れてならないのは民

衆のめざめである。今までの抑圧され、政治参加も決して許されなかった民衆が、フランス革命思想独立運動の思想により、人々が社会的に参加し出したことである。この先頭に立つのがベートーベンである。前にも少し触れたが、ここで少し具体的に例をあげておきたい。フランスのエラール社は当時から非常に熱心にピアノの開発に力を入れていた。このエラール社から贈られたピアノは当時としては素晴らしい出来であった。このピアノに刺激されて、かの有名な「ワルドシュタイン」を今までかつて聞いたことがない力強さと、壮大さを表現したのであった。イギリスにおいては、エラール社に優るとも決して劣らない、有名なブロードウッド社があった。エラール社としのぎをけずっていたわけであるが、これまた、すばらしい出来のピアノを寄贈すると、ベートーベンはこれに刺激されて、これまたすばらしい「ハンマークラフィール」を作曲したのであった。ベートーベンほどの大作曲家にしても例外ではないのである。

こうみえてくると、本当にその時代の社会の生産性、資本主義の発達と、密接につながっていることがわかる。これはピアノに限らず、あらゆる楽器についても同じことがいえる。バイオリンに目を向けてみると、ストラディバリが活躍した17・18世紀において、すばらしい名曲が数多く生まれ、バイオリンのテクニクの面においても、すばらしい進歩をとげるわけである。とりわけ、弓の改良で（今までは逆に反っていた）画期的と思えるほどバイオリンの表現とテクニクに進歩と幅を持たせたのであった。これはその時代の音に対する社会的欲求も影響しているわけである。これは今まで、比較的狭い会場において演奏が行われていたわけで、そばで聞いて美しい。そして、音量も比較的小さい物が好まれていたわけである。この音に関してはピアノをもう一度思い出ししてみれば一目瞭然である。ハーブシコードはfもpもあまりきかない小さな音であるが、それにひきかえ現在のピアノの圧倒する繊細さダイナミックな表現の幅の広さは、なんとすばらしい楽器の発達であろうか。生産活動が活発になり、人間の自覚も活発になり、大きなホールも出来て、大勢の人の中で演奏するようになってくると、今までの楽器では、音が非常に貧弱になり、美しい音色だけでは通用しなくなるわけである。そこには自ずと迫力のある、人を圧倒する音量と力強さが要求されてくるわけである。

これは楽器の発達が作曲家を刺激し、また、社会的欲求も自ずと生まれてくるという相関関係をみるのである。これはその時代の政治と、また、同じように深い関わりを持つのである。そして、その人の芸術家的個性、また、人間的個性の、ものとのとらえ方、思想に深く関係していることも見逃せない事実である。殊に、ベートーベンの時代になると、個人的思想が芽生え、前にも少し触れた、フランス革命の自由・平等・博愛の精神がすべての人々に息づいてくるのであった。とりわけ、ベートーベンの全世界的な音楽観は、今日もなお息づいて我々を感動させているのである。このように作曲家、演奏家、鑑賞者すべて、社会と共に動いていることがよくわかる。

#### 4. 音楽の心理

一方、音楽の方から社会を見た場合、意識的にしろ無意識的にしろ、非常に大きな影響を与えている。国においては国歌があり、身近なところで考えれば運動会には音楽をかける。これは音楽が好きとか嫌いとか関係なしに、全員に鳴りわたっているのである。一体これは何を意味するのだろうか。どんなに音楽の嫌いな人でも、やかましいから音楽を止めろとか、音楽があると記録が延びないとか、こういうことは未だかつて一度も聞いたことがない。

これは無意識のうちに音楽を肯定しているわけである。裏を返せば、音楽がよい意味の影響を与えているのである。これは本質的に人間は音楽と深い関わり合いを持っているわけである。我々の本質をつかさどっているものは何だろうか。それは外ならぬ鼓動と声である。この鼓動こそがリズムの根源であり、声こそが音の根源であり、言葉には感情表現によって音の高低がある。こうみえてくと、人は生れながらにして、音楽の本質を持っていることである。

人はよくリズムがわからない、音がわからない、したがって、音楽がよくわからないということになるわけであるが、断じて、音楽がわからないのではなく、理解しようとしただけである。言葉がわからない人がいるだろうか。いないであろう。

音楽は非常に言葉と似通っているわけである、ここで、言葉を理解すると言うことを考えてみるに、我々は言葉を一つの「グルーピング」としてとらえていることがよくわかる。「あしたあそこへ遊びに行きましょう。」このフレーズをみるに、言葉を一つずつ単独に「あ」「し」「た」というふう感じ取ってはいないということを経験し、感じると思う。また、丸や点がなくても、一つのグループとして感じ取っているわけである。

ということは、一つのグループとして、フレーズとして、受け取っているわけである。これを人々は、何の抵抗もなく、ごく自然にそういう行ないとしているわけである。音楽においても、これとまったく同様の行ないが行なわれていることを知るのである。だから、音楽がよくわかる、ということは、各自の頭の中でこの「グルーピング」がスムーズに行なわれていることなのである。また、言葉にしても、非常に声の高低と、リズムがあるのを感じるだろう。これは国により、民族により、多少のニュアンスの違いはみんな知っているはずである。

こうみえてくと、人間の歴史は音楽の歴史ではないかと思える程、深い関わりを持っていることを知るのである。したがって、音楽を知らない人はいないと言っても過言ではない。わからない、知らない、という人は、非常に不幸なことである。こういう風にみえてくと、音楽が人間にとって「自然発生的」で、また、当然そうなったであろうことを知るのである。

この「グルーピング」を考えると、我々は「時間差」のあることに気がつくだろう。前に述べた「あしたあそこへ遊びに行きましょう」を思い浮かべてみて欲しい。最初の「あ」と最後の「う」との間にかかなりの「時間差」があることを知るだろう。ここに「未来」と「現在」と「過去」の同時進行とでもいおうか、明らかに終っているのだが、あたかも現在のように感じる過去、現在であるのだが、ある程度予想出来る未来、この現象が絶えず繰り返されながら進行していることを知るのである。

したがって、これが正常に行なわれれば、良いわけであるが、これがノイローゼ的になれば、どういう現象がおきるのであろう。正常な時の現在的過去は 5 秒までと思うが、これ以上になると我々は未来進行への妨げとなるであろう。これをピアノのペダルにたとえるならば、適当なカッチングがあることによって、はじめて、未来進行が正常に行なわれることを知るであろう。これを踏みつばなしにしたらどうなるか。前進運動はおろか、混乱を招き、正常な行ないが全く行なわれないことを知るのである。このように音楽も言葉も絶えずグルーピングが形成されながら、時間の中に没頭しているのである。

## 5. お わ り に

このように考察してみると現代の歌謡ブームをとりあげてみたくなるのである。今のように盛んなの



は、一体何に起因するのだろうか。音楽の時間に見向きもしなかった人々が、ことある毎に歌いまくっている。

我々が音楽を語る時、まず中心に考えることはバランスとか、調和であるに違いない。しかるに、クラシック音楽以外のジャンルにおいては、ある部分が極端な形で強調されているのに気づくだろう。ジャズ等の激しいリズム、これは極端に簡略化されたメロディーと、極端に簡略化されたハーモニーにのっかって、はげしい根源的なリズムだけが我々の精神を揺り動かすのである。

一方、歌謡においては、簡単にハーモニーとリズムにのって、メロディーが我々にせまってくるのである。この結果、メロディーを補強する歌詞が非常に重要な部分を占めていることに気づくであろう。この歌謡的なジャンルにおいては、この歌詞が非常に重要な役目を果しているのである。この歌詞が非常にわかりやすく、直接的に日常茶飯時を歌い上げているところに、多くの人々に共感を呼ぶのではないか。したがって、メロディーが先か、歌詞が先か、といわれると歌詞をとるだろう。歌う時に彼らは歌詞からメロディーが出てくるのがよくわかる。したがって、社会で経験するいろいろな感情が歌詞の中に凝縮されて、そこに人々は自分のことのごとくに共感を得ているのだろう。

これは歴史的にみてもそういえるのではないか。我国において、西洋音楽が輸入されだしたのは、明治に入ってからであるが、この入り方が問題なのである。明治政府は今までの鎖国から、一転して多くの西洋のものをどんどん取り入れていくわけであるが、音楽においては、少なくとも、今までの音楽とは別に、教育的に取り入れていったわけで、そこに非常に、ギャップができてくるのである。このギャップが、今までの音楽エネルギーと相殺されてしまって、学校の中だけの音楽教養の音楽としてのみ存在するのである。この結果が尾を引いて、音楽になじめない、音楽がよくわからないという人々が多く存在する結果になっているのである。

この歌謡の歴史は、明治に始まったとみるわけであるが、これはいろいろ入ってくるメロディーを自分のものとして歌い上げようとしているところにある。それはいつの世においてもそうであるが権力者に対する不満がメロディーに、いや、音楽を言葉によってもじってしまうのである。このもじり、この言葉こそ、人々の心の叫び、エネルギーとなって、歌い上げていくのである。

このエネルギーこそが現在の歌謡の世界を隆盛に導いていることはいなめない。そのために人々は、自分の最も身近な自分を見出しているのである。また、これは豊かな社会的背景が起因していることも事実である。したがって、このもじりが次第に変化し、現在においては、その人自身の身近なところに入り込んできているのである。

## 6. 引用・参考文献

アルノルド・シェリング編 ハンス・ヨアヒム・モーザー補 皆川達夫訳補 1978 『西洋音楽史年表』 音楽之友社。

歴史学研究会編 1971 『日本史年表』 岩波書店。

ヘーゲル 樫山欽四郎訳 1977 『精神現象学』世界の大思想 I ヘーゲル 河出書房新社。

ハンスリック 田村寛貞・牛山充訳 1977 『ハンスリックの音楽美論』 音楽之友社。

渡辺護 1969 『音楽美の構造』 音楽之友社。